

現代政治の 이슈ー（国内外喫緊の政治的諸課題 AB）
東日本大震災被災地（福島・宮城）現地研修報告

中根 一貴

まずは、今回の現地研修で視察や取材をさせていただいた地域の一部が、台風 19 号による被災に見舞われました。心よりお見舞い申し上げます。

東日本大震災被災地（福島・宮城）現地研修を 9 月 17 日（火）から 20 日（金）まで実施しました。さらに翌 21 日（土）にはオプション・ツアーを開催しました。この現地研修は、3 度目の実施となる本年度から現代政治の 이슈ー（国内外喫緊の政治的諸課題 AB）として正式な科目となりました。履修した学生は、事前学習においてインタビューや調査手法などについて学んだ上で、夏休みを利用して自らの興味に従い視察先について調べました。今回の現地視察は、被災地の新聞社や大学、被災者の方々のご協力とご厚意により実施することができました。改めてお礼申し上げます。

○9 月 17 日（火）

初日はいわき市を視察しました。午前中に 7 月に完成したばかりの福島県水産海洋研究センターを訪問しました。職員から福島県沖の魚介類の放射能検査などについてお話しいただいた後、同センターを案内していただきました。

午後には、いわき市漁業協同組合を訪問して、震災前の漁業の様子、震災後における福島県沖における試験操業やいわき市の水産業が抱える課題などについて取材しました。学生からの質問へ丁寧に答えていただき、取材は 2 時間以上にわたりました。これからの漁業の課題や安全・安心を求める消費者の要求に向き合う覚悟と弛まない努力の一端を垣間見ることができました。



写真 1：いわき市漁業協同組合でのヒアリングの様子

○9月18日（水）

2日目は、福島第一原発、廃炉資料館と福島復興給食センターを視察しました。被害の規模、廃炉に至るまでにかかる時間の長さや複雑な工程、東京電力の担当者の皆様からの率直な見解など、非常に多くの情報を入手することができた1日でした。それぞれの学生にとって大きな課題が視察を通じて提示されたと思います。

○9月19日（木）

3日目からは宮城県の津波の被災地を視察しました。宮城県の視察につきましては、宮城教育大学の武田真一先生と先生が主宰する自主ゼミの学生、教職大学院に在籍している現職の教員の方に大変お世話になりました。3日目の行程は以下のとおりです。

午前：気仙沼市杉ノ下地区→視察と語り部の方への取材

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館→館長による施設の案内

午後：南三陸町戸倉地区→視察

南三陸町生涯学習センターにて被災と復興の講話

→元副町長の方と元消防団副長の方からの講和と質疑応答

この日の視察では想像を超えた津波の威力とそれによる被害に圧倒されました。津波の被害を受けた方からのお話は参加学生の想像を超えているようです。まさに現地へ行って実際に取材することの大切さを体感していると言えるでしょう。



写真2：気仙沼市杉の下地区の慰霊碑



写真3：南三陸町戸倉地区の神社

○9月20日（金）

4日目は、前日と同じく宮城県の津波の被災地を視察しました。4日目の行程は以下のとおりです。

午前：旧石巻市立大川小学校→視察と語り部の方への取材

午後：女川町→視察

ご息を亡くされた経験から企業防災を訴える語り部の方への取材
東松島市野蒜地区→東松島震災復興祈念公園と東松島市震災復興伝承館の見学
東松島市の復興と野蒜地区の高台移転について市役所の方
からの説明と取材

ふりかえり

宮城視察では、救うことができたかもしれない命について考えることになりました。津波が襲ってきたときに何が生死をわけたのか、自分自身や近い人の身を守るためにはどうすればいいのか。これらの問いが頭から離れない2日間でした。とりわけ4日目にお話しいただいた方々の訴えは、これから社会人になる学生にとって、より心へ響くものだったと感じました。

また、南三陸町と東松島市の復興過程と現在の状況を知ることができました。ハードの面ではかなり進んでいますが、ソフトの面では様々な問題を被災地の自治体は抱えています。これらの問題は、被災地固有の問題だけではなく、むしろ日本の地方で抱えている問題が震災により可視化された、または深刻化したために生じたものと理解することができます。



写真4：旧石巻市立大川小学校



写真5：ふりかえりの様子

○9月21日（土）

最終日の研修は、オプションとして宮城県名取市閑上地区を視察しました。長く仮設住宅で生活した後に閑上地区で自宅を再建した方を取材しました。津波で九死に一生を得た話から現在の閑上地区の復興状況までの多岐にわたるお話を伺うことができました。復興過程における地域住民と行政の関係が重要であることを再確認することができました。

視察の最後に仙台市荒浜小学校遺構を訪問して現地研修を締めくくりました。



写真6：仙台市荒浜地区

震災から8年目を迎え、被災地ではかさ上げ工事や災害復興住宅の建設などが順調に進んでいるようにみえます。しかし、人口減少など、多くの問題はいまだに山積しております。なにより、そのような復興事業は、関連死を含めた、震災によって喪われた数多くの命の代わりにならないことは言うまでもありません。

現地では、震災の経験を後世に伝えるべく様々な取り組みがされております。宮城県と石巻市の教育委員会の方が初めて「大川小伝承の会」の定期語り部活動に参加するなど（河北新報2019年12月16日付「大川小の教訓を防災教育に 遺族語り部活動 宮城・石巻市教委など初参加」）、語り部の方の活動が新たな成果を生み出しています。また、語り部の方は、新たな事実や記録の発掘、今までに判明している事実やエピソードの再整理などを通じて、後世に伝えるべき「記憶」の構築に取り組んでいます。震災当時の記憶がより鮮明になることもあります。いつ発生するかわからない大規模災害に誰もが遭遇する可能性があることを考慮すれば、これらの取り組みの意義は非常に大きいと考えます。

参加した学生は、それぞれが関心を抱いていた問題についての考察を深めただけでなく、現地を訪問して実際に話を聞くことを通じて、複数の視点から問題を検討する必要性と、単純な見方では現地の問題を理解できないことを知りました。来年度以降もこの研修を継続することにより、多くの学生に深く学ぶ機会を提供したいと思います。



写真7：名取市閑上地区